

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「作業療法学」

信州大学医学部保健学科作業療法学専攻

上村 智子

私が作業療法士を目指したきっかけは、高校生の頃、予防医学・治療医学に続く「第3の医学」として、リハビリテーションという領域があることを知ったことです。もう30年以上前のことです。当時、リハビリテーションや作業療法という言葉は、たいへん目新しいものでした。その理念や新奇性に魅かれ、見学に行った病院で、作業療法を受ける患者さんの穏やかな笑顔に触れたことが、その後の私の進路を決めることになりました。

最初に勤務した日本大学医学部附属板橋病院では、様々な疾患と障害をもつ幅広い年齢の患者さんへの作業療法を経験しました。今も連絡を下さる当時の患者さんやそのご家族からは、障害をもって生きることの実態を教えてくださいました。また在職中、職場の上司の勧めで日本大学の大学院に入学し、医療・福祉工学を社会人学生として学びました。

教員になったのは、大学院修了年度に、ちょうど郷里の広島県が作業療法士を養成する大学を設立することになり、恩師や先輩に勧められたことがきっかけでした。

前任校在職中には、文部科学省の在外研究としてデンマークとスウェーデンに留学しました。このとき実施した高齢者リハビリテーション・在宅支援のフィールドワークをきっかけに、「認知障害や身体障害のある高齢者の生活支援技術の開発」研究に携わるようになりました。

30年前1,300人だった作業療法士は、今では66,000人になりました。当時、こんなことは誰にも想像できないことでした。今振り返ると、漠然とした憧れで入った作業療法の世界で、時代性と人の縁に恵まれた結果、今の自分が在るような気がします。

最近では、作業療法士の働く場所も、病院の医療サービスから、地域住民の保健福祉サービス、さらに官公庁の行政職や研究職、企業へと広がっています。これからこの道に進まれる後輩のみなさんには、作業療法の質の充実とさらなる社会貢献を期待しています。

(国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院  
昭59年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「乳腺・内分泌外科」

信州大学医学部附属病院乳腺・内分泌外科

渡邊 隆之

宮崎での学生生活も後半に差しかかり、診療科を選ぶにあたり考えたことは、手術に携わる診療科に行きたい→じゃあ外科か？という程度のものでした。おおまかに“手術”というイメージしか湧いておらず、6年の夏休みを利用し、はるばる宮崎より信州大学外科へ見学、実習に訪れました。当時、信州大学外科は、外科1、外科2に再編成され、最初の研修医を募集する時期でした。研修ではどちらの科も、またすべてのグループをローテーションできる利点があったため、まだ外科医のイメージが漠然としていた私にとっては、専門を決める猶予期間にもなると考え、入局を決めました。見学の実習生からは“夕飯や、飲み連れて行っていただいて、良くしてもらいました！”という話をよく耳にしますが、はるばる宮崎から実習に来た学生

(当時の自分)を、実習最終日の夜に、“飲み”にではなく、信大近くの某有名カレー屋さんの、食べ放題の方へ連れていかれた所から判断すると、今思えば“こいつは冷やかしだろうな”と軽く思われていた可能性が…。その後、“無事に”入局し、それぞれのグループをローテーションするにつれ、各分野の特徴を研修期間で実感し、最も興味を持ったのが、今の乳腺・内分泌外科でした。一番の魅力は、乳癌や甲状腺癌は、診断から、手術、化学療法などの治療選択、再発…、緩和療法、終末期まで、すべて中心となってマネジメントしていかなくてはならない疾患です。患者さん自身、またその家族と深く接し、問題を共に解決していく能力がなければ、一人前の乳腺・内分泌外科医にはなれないと思います。そんな事に魅力を感じ、日々精進している今日この頃です。そして診療科の皆がとても良い雰囲気で一丸となる働きやすい環境であり、あの時の選択は間違っていなかったと思っています。未だに、“こいつをうちに誘ったやつは誰なんだ？”と、カレー屋に連れて行かれた頃となんら変わらない扱いの軽さですが…。

(宮崎医大平14年卒)